

31
768



始



職業
才
一

棟
居
才
九
馬

71-768



はしがき

天が萬物を造る時には必ず各職分を與ふるのである。林間に囀づる小禽、野邊に萌ゆる雜草、一として職分の無いものはない。人類も亦同様である。さればその地位境遇の如何に拘らず、自己の職分を完うするといふ觀念を忘れてはならない。室鳩巢の駿臺雜話にある通り、松の心に千歳無く、朝顔の心に一日無い。だが、己れの性を盡すばかりである。天命を盡すといふ點に至ると、松と朝顔とに何等の異なるところはない。松に松としての職分があり、朝顔に朝顔としての職分がある。元來職分そのものに

内交

松野 下 一

松野 下 一

は決して高下が無い、たゞ各々その職分を盡すとす
るとによりて價值が生ずるのである。余が「職業第一」
を提唱する所以のもの亦實にこゝに出づる。

世人この書によりて能く職業の意味と消息とを解
して之を實行に現はし、何處までも緊張充實の氣風を
扶植し得て、幾分か今日社會上生活上幾多纏綿難解の
問題を解決することを得ば、獨り著者の幸のみならず、
亦實に國家の慶事と信するのである。

大正七年十月

著者しるす

目次

前篇

職業と人生……………	一
職業に高下なし……………	五
職業に等差ある理由……………	六
奮發努力の源……………	九
生存競争は進歩の基……………	一一
生存競争と生活難……………	一四
就職難と職業に對する態度……………	一五

目次

目次

職業と信念……………二
 獨立自尊……………二六
 職業道德……………三〇

中篇

職業と修養……………三一
 知識の修養……………三四
 忠實……………四一
 意志の修養……………四四
 正直……………四六
 勤勉……………五二

紀律……………六二
 忍耐……………六九
 情操の修養……………七三
 謙遜……………七四
 親切……………七七
 報恩……………八一
 身體の修養……………八五
 健康……………八六
 『日々の心得』……………八九
 職業と幸福……………九六

目次

三

後篇

目次

四

事務整理の根本的二要件……………一〇〇

二つの根本要件……………一〇一

縦の道德と横の道德……………一〇五

監督主義と信任主義……………一〇七

金銭貯蓄の必要……………一一〇

眞個の日本人たれ……………一一四

眞の忠君愛國……………一一六

犠牲的精神……………一一七

人格、權威及び名譽……………一二九

相手は天……………一二一

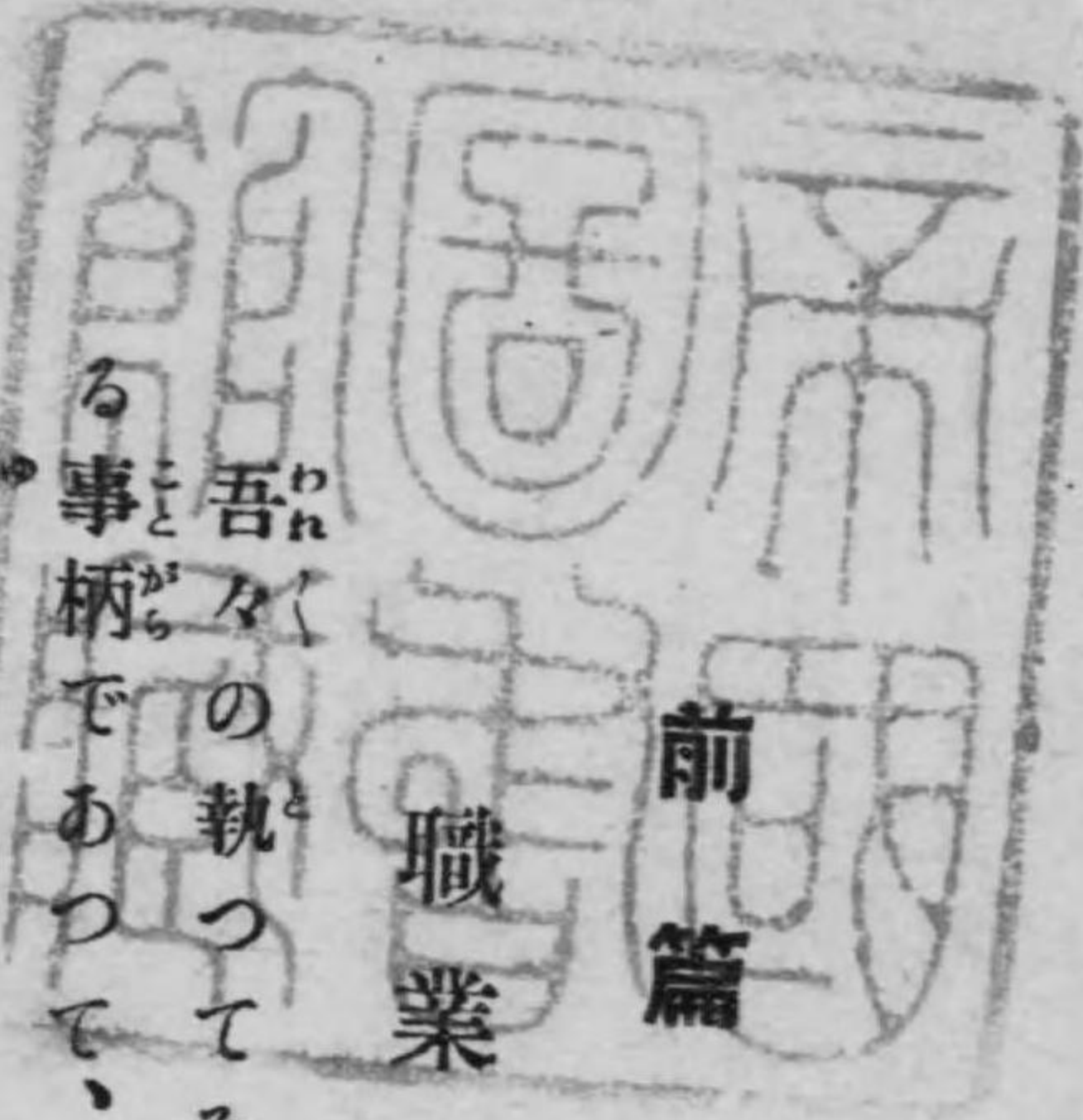
道は邇きにあり……………一二四

目次

五

職業第一

棟居喜九馬著



職業と人生

吾々の執つてゐる職業は孰れも皆な人生に必要な
事柄であつて、吾々人間が生れてその生命を保つ
て行くには、どうしても何か職業を執つて働かな
ければならぬ。そこで先づ人間には自分を保つて行

職業と人生

くといふ慾、即ち自己保存の慾がある。この自己保存の慾は誰れにもあるのである。次に人間には又た、自分の子孫を遺して更に自分の後嗣ぎを拵へて行くといふ慾、即ち種族保存の慾といふものがある。これは獨り吾々人間にばかりあるのではない、動物にもある。自己を保存して自分の生命を全うし、さうして子供を生んで後嗣ぎを拵へて行くといふ慾は、決して人類にばかり限つたものでなく、動物にもあり、又た植物にもあるのである。種を播いてさうして芽を出す、それから實を結んで後の子孫を拵へる、皆な同じことである。なほまた、この點は人

類動物に限つたことでなく、自然界に於て行はれるところのあらゆる現象が皆なこの原則に據つてゐるのである。

處が、人類には、動物とは更に一つ違つたところのものが有る。それは、何であるかといふと、理性——即ち英語でいふところのリーズン (Reason) である。之れは物を判断したり善悪を別つたりするところの性質を有つてゐるのである。すなはち、右に往かうと思へば右に往き、左に往かうとすれば左に往くやうに、自由意思を以つて悪い事でも善い事でも思ふまゝにすることが出来る。動物や植物や、その

ほか人類以外のものにはかういふ意思は無いのである。尤も動物には意思もある。けれども自由意思といふやうなものでなく、善い事でも悪い事でもたゞ自然に水の流れるが如く、已むを得ずこれをやつてゐるのである。處が人間はさうでない。左に往かうとするのを抑へて右に往くことも出来る。さういふ風に辨別の力があつて、その辨別の力に據つて吾々は自分自身の特色ある人格を築き又た展べ廣げて行つてゐるのである。これは實に人類にのみ特別な現象である。此意思よりして人類には更に自分の人格を保存して行くことが出来る。茲に於て、吾々には

四

又た人格保存の慾が生ずるのである。吾々人間の職業といふものは即ち、先づ第一には自己保存の慾から起り、次に種族保存の慾から起り、第三には人格保存の慾から起つて居るのである。この三つの慾を完うする——すなはち人生を完うする——爲めに職業といふものが存するのであり、又た必要なのである。

職業に高下なし

この關係からすると、たとひどんな偉い人の職業であつても、又たどんな卑賤なものゝ職業であつて

職業に高下なし

五

も、その間に高下の差別は無い。皆な同等であるの
である。大臣であらうが、又た極く細いところの仕
事をして居る八百屋のやうなものであらうが、各々
その智慧をもつてその生命を維持し、その子孫を繁
殖し、又己れの人格を全うして往くのである。即ち
その職業に高下の別は無ないのである。
この點は吾々の先づ第一に考へて置かねばならぬ
ところである。

職業に等差ある理由

併ししながら一方から観ると、職業に等差が生じて

來るのである。それはどういふわけであるかといふ
と、世の中の幸福を圖つて社會に貢獻するところの
分量の多い少ないに依つて職業に等差が生じ高下が
出来るのである。神の御心を奉じて神の事業を助け
て行く分量の多少に依つて、そこに仕事の等差高下
が起るのである。その分量の多い方の仕事が高貴な
のであり、その分量の少ない方の仕事が卑しいので
ある。
例へば、俥に乗る人も俥を挽く人も、職業に依つ
て己れの生を完うするといふ點から言ふならば全く
同等である。けれども俥に乗る人と俥を挽く人と就

職業に等差ある理由

八
れが偉いかといへば、俾に乗る人の方が世の中の幸福を圖つて社會に貢獻するところが一層多いならばこれを挽く人よりも偉いのである。併しそれが悪い事を考へたり行つたりする人であつて、世の中のやぐざ者であるならば、その人間は俾を挽く人よりも遙かに卑しいのである。

即ち社會に一層餘計な仕事をして居つて、餘計に世の中に利益を與へて居る人は偉らい、例へば商人にして見ても、其商店の爲めに非常な利益をするやうな人であるならば、その商店内の他のそれほどの利益をしないものよりも偉いとすることに定まつてゐる。

仕事に高下が生じ、職業に等差が起り、世の中に階級が出来るのは、實にこの理由に依るのである。

奮發努力の源

こゝに於て、奮發努力、勤勉精勵の精神が必要となつて来る。すなはち、向上發展をして世の中に餘計に利益を與へるやうに、又た世の中の幸福を圖る分量が最も多いやうにと努めるの必要が起つて来る。これがこの世の中に、すなはち吾々人類の社會生活に、奮發努力の起つて来る源である。

若し最初に述べたやうにすべての職業が平等であ

るといふならば、誰れも奮發もせまい、努力もせまい。而かもこの吾々の世の中に奮發もあり努力もある。所以のものは、實に俾を挽く人よりも乗つて居る人の方が偉い、一層社會に貢獻してゐる人である。そこで自分も一つ何か世の中に利益を與へ貢獻をして偉い人とならうとするからである。

だから、この職業といふもの、性質を、むづかしく主觀的に考へると、一番初めに述べたやうに平等であり同じ價値である。けれどもこれを客觀的に考へると、そこに差別があり高下がある。故に吾々は克くこのところを辨へて、世の中に利益を施す分量

の多いところの人間にならなければならぬ。そしてそれには、段々發展向上して上に昇つて行くといふ氣象が無ければならぬ。すなはち奮發努力の精神がなければならぬのである。

生存競争は進歩の基

職業と人生との關係は實に以上の如くであつて、職業の必要なことも又十分に了解されたと思ふ。すなはち、人生一日も職業無かるべからずである。若し職業を有つて居らぬものがあるならば、その人は到底生を完うするわけには行かない。丁度植物が

生存競争は進歩の基

花を咲かすことが出来ないのと同じである。

ルイテルは、『人生は恰も水車に附けた石臼のやうなものである、その中へ粉を入れて挽けば立派な粉が出来、けれどもその中の粉を取つてしまつたらばその石臼は段々磨滅して壊れてしまふ』と、斯う言つて居る。その粉といふは、人生に於ける職業を指して居るのである。人生に職業が無かつたならば、世の中を壊してしまふ。社會を破滅せしめてしまふのである。

それ故に職業は人生に一日も缺くべからざるものである。すなはち人間は職業をどうしても有つて居

らなければならぬものである。而してその職業は既に述べて来た通り、それに依つて己れの生を愈々益々向上せしめることを得て始めて完うされるのであるから、職業を有して居れば落伍者になつてしまふ。各々自分自身の職業に據つて、自分が一番偉いものになりたいとの競争心を抱いて、奮勵努力しなければならなくなるのである。これが所謂生存競争である。そしてこの生存競争から、職業といふものが段々發達して行くのである。即ち生存競争はすべて進歩の基である。善い意味から言へば、社會に

生存競争は進歩の基

はどうしても生存競争がなければならぬのである。

生存競争と生活難

然しながら又た他の意味から言ふと、生存競争といふものがあればこそ、今日の如き生活難といふ現象が生じるのである。今日世の中の多くの方面を眺めて見ると、生活の困難を感じて居るものが澤山ある。生活の困難を來たすのは色々様々の原因からであるが、詳しい議論は兎も角も、そこには經濟上の色々已むを得ぬ理由があるのである。兎に角今日の時代が、生活困難の時代であることは争はれない。

就職難と職業に對する態度

従つて心に適つたやうな職業を得るといふことは甚だ困難である。實際のところ無職で暮して居る人が澤山ある。また假令或る職業に就いてはあても、いや／＼ながらその職業に従事してゐるものが甚だ多い。近來就職難の聲——職業に就くことの困難であるといふ聲が、方々に於て聞かれるが、これは實に偽らざる人心の現はれたものである。これは或る意味に於ては如何にも同情に堪へないことである。世の中の經濟上の壓迫から自然に斯ういふ現象を來

就職難と職業に對する態度

したのであるが、これは經濟を預つて居るものが早くこゝに著眼してこれを矯正しなくてはならない。けれどもこれはなかなか大問題で、にはかに矯正されさうもない。

併しながらこの間に處して獨り就職難を歎いて心配して居つたところで仕方がない。且つ一面から言ふならば、世の中が進歩すればする程分業といふものが起つて来る。業務が益々細かく別れて来るのであるからして、従つて職業が無いなどといふ心配がなくなつて来る。少なくとも私の見るところでは、その尋ねるところの職業が必ずあるとおもふ。到る處

に職業が澤山あるとおもふ。たゞ、どうも世の中の人——殊に學校卒業生に、職業を選び好むところの弊が大分あるとおもふ。どうも自分の氣に食はぬ、何んだか好かないといふやうなことを言つて、その職業を選び好むする弊がある。その爲めに職業が無い。そして結局、たゞ徒らに彼地此地と彷徨きまはるやうになるのである。これが就職難の大部分をなしてゐるといふてもよい。これは實に困つたものである。かういふ種類の人は詰り必ず成功をしない。何時でも失敗をするにきまつてゐる。

西洋の譬へ話に斯ういふのがある——

一八
或る金持の人が自分の相續人を定めんとする時に、
五十町歩もある玉蜀黍の畑を一直線に住つて、さ
うして一番大きい玉蜀黍を拾つて来た者に相續を
させるといふことにした。すなはち兄弟の間に懸
賞を致したのである。すると一番總領の子が先づ
眞ッ先きに駈けて往つた。そして途中で一つの玉
蜀黍を見附けた。そこで先生喜んだ。けれどもそ
れで歸つて來ることをしないで、まだもう少し大
きなのがあるだらうと段々先きへ往つた。それか
ら次男も矢張り同じく途中で一つ見附けたが、それ
もまた更に大きいのをと思つて段々先きへ行つた。

處が何れも先きにあるのは小さな玉蜀黍ばかりで、
どうしても大きなのが見附からなかつた。然るに
三男は途中で一つ拾つて直ぐ家へ持つて歸つた。
處が三人の中一番あとから往つて一つ拾つて直ぐ
歸つた子供の玉蜀黍が一番大きかつた。そこでそ
の三男が相續した。

といふのである。これはすなはち人生と職業との關
係に譬へた寓話で、最初の二人は初めにあつた玉蜀
黍に満足せず、即ち自分の居るところの立場に立つ
てそれに満足することをしないで、まだ大きいのが
あるだらうとおもつて、段々先きへ往つて却つて小

二〇
さなものになつてしまつた、然るに三男は初めに拾つた玉蜀黍に満足して、すなはち自分が神から恵まれた職業に満足して、それでとう／＼親の相續をしたらといふのである。これは實に眞理を穿つたもので、この世の中の多くの人は、職業を轉換して始終彼地此地と彷彿つきまはつて居るからこそ、本當のよい職業を持つことが出来ないのである。
凡そ世の人々がその職業を矢鱈に轉換するのは、自分の職業が兎角馬鹿に苦しく見えて、他人の職業のみがひどく立派に見えるからである。けれども、事實は決してさうではなく、他人の職業の良いところ

ろばかりを見、自分の職業の悪いところばかりを見るから、そのやうな考へも浮ぶのであつて、これは餘程氣を附けて慎まなくてはならぬところである。まことに、就職難の大部分はこの點の慎みを忽がせにして居るところから生ずるのである。すなはち吾は、自分の職業に對する態度といふものをしつかりと定めて、徒らに上に述べた譬へ話の長男次男のやうに、自分の職業に不足を唱へて轉々するやうなことの無いやうに心懸けなくてはならない。
米國のマシユースといふ人の言つた言葉に、『世の中には圓い柄が四角な孔へ入れられる場合もある、そ

就職難と職業に對する態度

二二
ここで徒らに圓い孔を探がし歩いて居るよりは、自ら
努力して四角な柄となる方が早道である』といふの
があるが、これはすなはち、矢鱈に職業を轉換する
ことをしないで、最初得たところの職業に興味を持
つて、それで辛抱する方が成功の早道であるといふ
譬である。どうも今日の世の中には、何時でも丁度
合つた筒を持つて行かなければ、融通のつかぬやう
な偏屈な人間が多いやうである。これはまことに困
つたことである。もつと勇敢に快活な態度で、飽く
まで自分の職業にぶつかつて行くといふ風でなくて
はならない。

職業と信念

苟くも自分の職業はどこまでもこれを尊んで行く
といふ信念がなければならぬ。私は矢鱈にその職業
を轉換する人の多いのを見る毎に、その人の信仰の
力の弱いのに驚かざるを得ない。元來職業を轉換す
るのは、信念の甚だ薄い人、信念の甚だ乏しい人で
ある。また自分の理想の甚だ低い人である。一旦職
業を得た以上、その職業が、自分がそれにたづさは
つて居る爲めに、益々立派になるのだといふほどの
抱負がなければならぬ。自分が若しその職業を得な

二四
かつたならば、その職業は劣るであらうと考へるほどの熱情がなければならぬ。自分は最上の仕事を執るものであるといふ理想がなければならぬ。一旦この仕事に従事した以上は、飽くまで責任をもつて然諾を重んじて見せるといふ武士的氣質がなければならぬ。また一旦職業に就く以上は、それに成功しただけの趣味を有たなければならぬ。かういふやうな信念を缺く人は、何時でもフラクして居る人であつて、必ず失敗をする。
すなはち、假令どんな卑賤な職業、どんな苦しい職業であつても、これに従事する人が、自分がなか

つたならば、この職業は困るのである、自分が此處に居ればこそやつて行けるのである、といふだけの固い確信を有つて居なくてはならぬ。でなくてはそ職業は成立つて行かない。たとへばかの宮城の御濠端の石の崖の如く、あの崖には大きな石と小さな石と色々の分子が籠つて居る。たゞ表面に見えるやうな大きな石だけで出来て居るのではない。あの石の崖の中にはその大きな石の間に小さな石が澤山あつて、これを組立つて居るのである。然るに若しその小さな石が各々自分はつまらぬものである、役に立たぬものであると言つて、あの崖から皆な離れた

としたらどうであらう。決してあの如き堂々たる石
崖は成立つものでない。然るに今日職業に従事して
居るものうちには、自分は實につまらぬものであ
ると言つて、自ら卑めるものがある。これが今日の
一大弊風をなして居ると私は信ずるのであるが、實
に怪しからぬことである。吾々各々この點に注意し
て自分を尊び自分を重んずるといふ精神、すなはち
固き信念を有たなければならぬのである。

獨立自尊

人類は平等である。男女子供すべて人類は平等で

ある。まことに人格は皆な同等である。孰れも神様
の前へ行つて神様から變り無く可愛がられるところ
の一人である。それが自らを輕蔑し、また自分を見
下げて仕舞つて、自分はつまらない人間である、な
さけない人間であると言ふことは、實に聞えぬこと
である。兎も角も人格といふものは尊いものである。
假令どんな職業をして居つても神様の前へ出て決し
て恥づべきでない。卑下すべきでない。それを下ら
ない事にクヨクヨして心配をして居るからこそ、人
間が愚圖になつてしまふのである。そこをキツと踏
みこたへるのが信念である。獨立自尊といふことは

此處から起る。慶應義塾の鎌田榮吉先生は獨立自尊
といふことを唱へて居られるが、私もそれには賛成
である。即ち職業を執る以上は自分が一番偉いもの
だといふ抱負があり、この抱負を伸ばして興味を生
じ、そして遂に自分とその職業とが同化するやうに
なつて來るのである。

私は常に職業を執つて居られる人が、斯かる抱負、
斯かる信念、斯かる信仰の念に富むやうになつて來
なければならぬとおもふ。今日の世の中の人々は、
どうもこの信念が乏しい。この信仰が薄い。世の中
のことをば何もかもたゞ智慧ばかりをもつてやつて

行かうとして居る。智慧の競争、何んでもかんでも
智慧をもつて胡麻化さうとして居る傾きがある。こ
んなことでは到底大國民にはなれない。もう少し實
着に信仰をもつて仕事をして行くやうにならなけれ
ばならない。處がそれとは全く反對な傾向が強くて、
たゞ徒らに神經過敏になつてしまつて、無暗矢鱈に
驕奢の好みを、用も無いのに自動車や飛行機を
り、無暗に洒落て奢侈つて見たりする。どうも人間
が輕薄になつて柔惰懦弱淫靡の風が甚だしく、従つ
て人格も何もヒヨロ／＼な人間が多く、實に情けな
いことである。

職業道德

斯ういふ世の中であるからしてそこで是非大いに職業に従事するもの、修養、すなはち職業道德といふものを力説主張しなればならぬ必要がある。この道德觀念をもう少し發揮して健全なる人格を修養し、以つて獨立して世の中に立つて働かうとするところの氣象を青年諸君の間に起さなければならぬとおもふ。これが目下の緊急事である。

そこで自分は、更に進んで私の信ずる職業道德の内容に就き稍詳しく論述して見たいと思ふ。

中篇

職業と修養

さて吾々が職業を執つて行く上には如何なる修養に心懸けなければならぬか、すなはち實務家たるには如何なる要件が必要であるかといふに、私の信ずるところでは、知識の修養、意志の修養、情操の修養、及び身體の修養、この四つのものが必要であると思ふ。およそ職業を完全に執つて行く實務家としては、この四つの修養の一つでも缺いてゐてはならない。この四つの要件の、どの一つを缺いても、實

三二
務家としての健全なる發達は期し得られぬのである。
人間たる人格、國民たる人格を造らんとする教育の
目的とするところも、知情意の發達に加ふるに身體
の強壯を圖るにあるのであるが、吾々が職業的人格
すなはち、事務家たる健全な人格を建設するに當つ
ても、精神の内部から充實を圖つて行く爲めには、
この四つの修養を是非とも必要とするのである。
尤もこの四つの修養は、これを述べたり論じたり
する便宜の上からかう別けたのであつて、實際に於
ては關係の無い離れ々な別々なものでは無くて、
お互に相關係して體得されるのである。従つて以下

述べて行くところでも、知識の修養の要素として舉
ぐるもの、或るものは同時にまた、意志の修養の
要素であることもあり、また意志の修養の要素とし
て舉ぐるもの、或るものは同時にまた、情操の修
養の要素であることもあることを、忘れてはならな
い。孰れにしても、是れ等の要素が瓦礫のやうに、
ゴロ／＼と孤立して體得されるのではなくて、渾然
として溶け合ひ結び合つて、始めて立派な人格を造
り上げるのである。といふことを、先づあたまに置
いて、克く味ひながら讀んで行つて貰ひたいのであ
る。

知識の修養

知識の修養はこれを三方面から求むることが出来る。第一は専門的知識の修養であり、第二は注意力の修練であり、第三は多方面に鋭敏なる注意を拂ふといふことである。

第一に知識の修養は、常に注意して各方面から求めることに努めねばならぬが、殊に自分の職業に關する専門的知識は實務家として差當りの必要條件であるばかりでなく、假令何年経つてもまた如何に老練になつても必要缺くべからざるものである。従つ

て常にこれが修養習得に心懸けることの必要なるは改めて言ふまでも無いことである。

第二に注意力の修練であるが、これは平生物事を疎かにせぬやうに心掛けることによつて體得される。すべて世の中の事は、何事に限らずたゞウカ／＼と看過してしまつては何んにもならぬ。注意して視察し、研究することが必要である。偉大なる發明も、稀代の發見も皆な注意力の發達にほかならぬのである。例へばコロンブスの亞米利加大陸發見の如き、すなはち彼が幾十日かの長い間の航海を續け、船員ののすべてが疲労と困苦とを訴へて、孰れも船を引返

さんと主張するうちに、毅然として撓まずなほ一縷の望を囑して航海を續け、遂に水天髣髴の間に大陸の片影を望み見て漸くその目的を達したる如き、あるひはガリバルヂーが軒端に吊したる蛙の雷鳴に微動するを見て電氣を發明したる如き、孰れも皆なその本は一寸した注意から生れたものである。斯く一寸した注意から世界を轉倒せしめるやうな発見や發明が成し遂げられるのであつて、注意を怠らぬものにとつては、宇宙間の森羅万象悉く知識の材料たるざるはないのである。工場の隅にも、店の真中にも、三越や白木屋の陳列臺の上にも、到る處として知識

の潜在して居らぬ處はないのであるから、吾々は日々接觸する事物を漫然看過して了ふやうなことをせず、何等か知識の材料を得るやうに心懸けなければならぬ。學問をするにしてもたゞ書物と首つ引ばかりして居てはいけぬ、常に注意してその中から何物かを見付け出すことに努めなければならぬ。世間には注意力の集中は閑靜な處でなければ出来ぬといふ人があるが、そんなことではならぬ。どんな忙がはしい處でも、例へば機械の囂々たる工場の中でも、又は騒々しいほど賑やかな商店の中でも、常に注意力を集中し、精神を統一する事が出来るやうでなくて

はならぬ。夜中に人の寝静まつた時でなければ精神が統一しない、良い考が出ぬといふやうなことで、駄目である。注意力は何時如何なる場合に於ても、最も鋭敏に働かせて、直ちにこれを利用するやうにせねばならぬ。勿論斯くすることはなか／＼六ヶ敷いことではあるが、六ヶ敷いと言うて放任して置いたは益々駄目である。

第三に何事に拘らずたゞ自分の専門の事より一歩も外に出ぬといふやうなことで無く、多方面に鋭敏なる注意を拂はなければならぬ。例へば織物の事にしても、たゞ品質の善意を鑑別する計りでなく、そ

の當時の市場に於ける経済状態より、生産地の状況等に至るまでを克く調べて置くこと、商賣の掛引上大いに利益するところがある。自己の専門ばかりに没頭して一歩も外に出ることを知らぬものは、獨立の生活を營む上に於て常識を缺いて居るものと言はねばならぬ。電車に乗るにせよ、汽車に乗るにせよ、道の遠近、距離の長短がある。それを平素に於て注意して知つて居ると時間の經濟上非常に利益するところがある。その他計算事務の如きに就いても、平素より注意してその日その日を整理して行くのと、大ざつぱにして置いて間際になつて騒ぎ立てるのは、

損得の上に大變な相違がある。そこで實務家として立派に成功を収めて行くには、成るべく多方面に注意力を働かせる必要がある。が、さうは言つても、私は自己の専門をそつち退けにしてそれ以外に矢鱈に手を出せと言ふのではない。専門以外の事には手を出さずして、眼を向けよ、すなはち注意力を働かせることだけは怠るなといふのである。これも決して容易い注文ではないが、非常に大切なことである。から忽諸に附さぬやうにして頂きたいのである。斯く知識の修養を圖る爲めに注意力の修練を心懸けねばならぬのであるが、この注意力といふ心理的

要素は道徳的要素としては忠實といふことになつて現はれる。

忠 實

従つて忠實といふことは、職業道徳中の重要な一つの徳目として大切な位置を占めるのである。注意力の修練されて居るものは自ら事物に忠實になつて來るのであつて、すなはち上に述べたやうな諸々の事柄を克く實行すればそれで忠實となるを得るのであるから、別に改めて説明する必要も無いわけであるが、念の爲めに今少し言ひ添えて置かう。

事ことの大小だいせう難易なんいに拘からず、何事なにごとを爲なすにしても精神せいしんを籠こめてやるのでなければならぬ。始終しじう自分の職しやく業ぎやうに就ついては研究けんきう的態度たいどを以もつてし、道みちを歩あむ時ときにも家いへに居ゐる時ときにも、常つねに自分じぶんの職しやく業ぎやうを忘わすれず、その職しやく業ぎやうに依よつて自分じぶんも立た身しんしたるその職しやく業ぎやうをも一層いちじやう立派りつぱなものにするといふ心懸こころがけでなければならぬことは前まへに述のべたとほりであるが、更さらにそれと同時に、仕し事を熱心ねつしんにやることを心懸こころがけ、假令たとひ言いひつけられ或あるは注文ちゆうもんされた事柄ことがらのうちにあ、これは下くだらぬ、ア、これは面白おもしろくないといふやうなもの、あつた場合あひあでも、喜よろこんでこれに當あたり主命しゆめいを全まうし或あるは依い頼たい主しに満まん

足あしを興あへるといふ風かぜに、如何いかなる場合あひあにも熱心ねつしんに眞ま面目めんめいに仕し事を執とるのが、忠實ちゆうじつたる所以ゆゑである。つまり己おのれの職しやく業ぎやうに忠實ちゆうじつで、仕し事を始し終しゆう追おひかけ追おひかけして行くやうな人ひとでなければならぬ。大たい概がいの人は、仕し事を追おつかけて行いかないで、仕し事ことの方ほうに追おはれるのであるが、それではいかぬ。また世よの中なかには、今日こんにちの事ことを今日こんにちにしないで、明日あしたに延のばさうといふ人ひとが多い。明日あしたありと思おもふ心こころに引ひかさされて今日こんにちも空くわしく暮くしけるかなといふやうな人ひとが多いのである。けれどもそれでは

忠實

いかぬ。命せられたことを明日に延ばさうなぞといふそんな卑怯な考へを持たないで、その日にすべきことは必ずその日にするといふ心掛けで、専心忠實にその職業に盡すことが肝要である。そして自分の熱心と注意とに依つて、また忠實な研究的態度に依つて、自分の職業をやつて行くやうに爲なくてはならぬのである。

意志の修養

意志の修養とは、言ひかへれば、物事を正しくするの力を養ふことである。嘘、偽、または策略、情

實あるひは妥協といふやうなものは、處世上決して健全なる分子ではない。西郷南洲翁が、

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ゆべからず。

と言つたが、私はこの言葉に非常に敬服して居る。今日までの多くの人の處世の経路を見るに、權謀術數とか、掛引策略とかに依つて世渡りして来た人は最後に於て殆ど皆な失敗してをる。これに反して常に正道を踏み、誠心、誠意、正眞、公平に生活して来た人は、必ず皆な成功してをる。是は今迄の歴史が證明してゐる。生きた實例が明かに證明してゐる。

而してこの誠心誠意正しきを踏む力を練磨する、すなはち意志の修養をする爲めには、主として正直勤勉、紀律、忍耐といふやうな徳義を實行することを中心掛けなくてはならない。以て順次にこれ等の徳目に関して少しく説明を試みて見よう。

正直

正道を踏んで著實に正直に世の中を渡つて行く人は、成功は少々遅いかも知れぬが、中途に於て躓くやうなことはない。策略を弄し、眼の前を胡魔化して、事物に掛引をすることは、一寸見には可いかも

知れぬが、すなはち一時はそれで結構であるかも知れぬが、決して永遠の策ではない。何時かは必ず失敗する時が来るのである。外國人が我が國人の事を彼れ此れ批評するのは此處である。「日本人は實に立派な性格を備へた國民であるが、悪いことが一つある、それは當てにならぬといふことである」と或る外國人が言うたさうであるが、當てにならぬとはすなはち右に述べた策略を弄することを指して居るのである。言行一致を缺いて居ることを指して居るのである。今日なほ我が國の貿易が振はないのである、實にその原因が斯ういふところに胚胎してゐ

正直

るのである。内と外とまた前と後とそれく違つて居るやうな商業は成功するものではない。であるから職業にたづさはる人すなはち實務家としては、何處までも當てになる人とならなければならぬ。あの人の言ふことなら間違ひはない、必ず大丈夫であるといふやうに信用を置かれるやうに努めなければならぬ。商賣繁昌の原因は言はずもあれ、活きた道徳の境地も畢竟此處を措いてほかにないのである。日清戦争の時、日本が支那から償金二億萬圓を取つてそれを英蘭銀行に預けたところが、英蘭銀行で受取證も預り證も呉れない。そこで當時の日本公使

が、どうぞ預り證を呉れと言つた所が、英蘭銀行の支配人は、「私の處では曾て預り證を出したことが無い、あなたの方で強いて預り證が御入用だとあれば御氣の毒ではあるがこの金を預ることは御斷り致しませう、私の店の方針を今あなたの爲めに變へるわけには行きませぬ」と言つて斷つたといふ話である。二億圓の金は大變な金である。それなのに預り證も呉れない。そこが信用である。そこに信用の妙諦がある。こゝに至ると信用の尊いことがわかるのである。英吉利人が多く嘘を言はないのは、この信念があるからである。英吉利ではステーションへ行つて

物を渡しても一つも返り證を呉れない。これは甚だ不安心のやうであるが、決してさうでない。先きのステーションへ行くと、ちやんと荷物が著いてゐる。それをてんぐにこれは僕の鞆だ、あれは僕のだと言つて、自分のを選び別けて持つて行くのである。それで間違ひがない。これも信用である。また亞米利加の桑港や市俄古あたりでは、郵便物がポストに一杯になつてをる時は、そのポストの上に自分の出さうとする郵便物を載せて置けば、それで間違ひなく集配人がそれを取集めて歸つて行く。これも信用である。國民の間に正直の徳が發達して居るからで

ある。然るにこれに比べて我が國の實際はどうであらう。ポストの上に置かれた郵便物どころでなく、函の中にある郵便物をすら鳥竊を以て引出す人があるくらゐである。實にわれながら我が國民の間に正直の徳の發達してゐないことは憂慮に堪へぬ。これは速かに改めて信用を得るやうにならなければならぬ。

ジョン・ホワイトは「正しきを踏んで怖るゝ勿れ」と言ひ、ルーテルは「假令屋上の瓦は悉く鬼となつて吾を責むるも我れ行かん」と言ひ、孔子は「己れに顧みて正しければ千萬人と雖怖るゝに足らぬ」と言

正直

はれた。かういふ勇氣と自信が出来て来なければ、日本の信用は勿論、吾々各自の信用も生じて来ぬのである。故に吾々は飽くまで信用を重んじて、正直に世渡りすることを努めなければならぬのである。

勤 勉

世の中に三種の人がある。第一は命せられた仕事を満足に爲し得ない人である。これは無能者であつて到底昇進することの出来ない人である。第二は、命せられた丈けのことをして止む人、上から言ひつけられた丈けのことをして止む人、言ひ換へれば、

鑄型に入れたやうな人、活版で押したやうな人である。これは普通の人であつて、これも始終同じ地位に愚圖々々してゐる人で、矢張り昇進することの出来ない人である。第三は、自分の命せられた以上のことをする人である。昇進し成功するのはこの種類の人である。世の中には、上の人の言ひ附けたことをば大抵にして片を附けると、引くり返つて寝てゐるやうな人が大分ある。これは實に話にならぬ善くないことである。けれども、自分の命せられたよりも以上に何かその仕事に利益ある處置をしたものだ、言ひ附けられたよりも以上に一つ立派な結果を

勤 勉

得たいものだ、すなはち八分だけのものを言ひ附かつたら十分、十分だけのものを言ひ附かつたら十二分といふやうに、言ひ附かつた以上によつて見ようとする人、そしてつまりその結果言ひ附かつた以上上の効果を擧げるやうな人こそは、始めて成功する人である。

而して勤勉は實にこの第三種の人に於て起る。すなはち勤勉の人にして始めて成功し得るのであるといふことが出来る。僅かばかりのことは目にも立たぬ、利益にもならぬ、と言つて、まめに仕事をすることを嫌ふ人が世には随分多いのであるが、これは

實に宜しくないことであり、また困つたことである。

ナポレオンは「不能といふ文字は字引にない」と言つた。また英國の大政治家チャタムは「自分は不可能を蹂躪す」と言つてゐる。これらな皆な英雄傑として稱へられてゐる人が、世の中には「出来な

い」といふものはないといふ心内の確信を言ひ現はしたものである。まことに尤もなことである。「爲せば成る成らぬは己が爲さぬなりけり」とある如く、如何なる難事と雖も爲せばすなはち成るのである。處が勤勉努力の人でない、この自ら進んで爲すといふことをしないで、つひに何事をも成し得ないで

終るのである。

昔加藤清正がその部下を集めて、お前達が皆な裸かにされたといふ場合があつたらどうするか、即ち裸か一貫になつた時にはどうするかと問はれた時に、その部下達は皆な弱つて答へることが出来なかつた。その時清正が自らそれに答へて次ぎのやうに言つた。自分が若し裸か一貫になつたら、先づ第一に湯屋の三助になる。湯屋の三助は著物が無くても當分は勤まる、その中に一生懸命に働く、さうすると親方が、可哀想だと言つて著物一枚ぐらゐは呉れる。若し呉れなかつたところでは宜しい、兎に角一生懸命に働

てさへ行けば幾分の手當では呉れる、さうなれば大丈夫、それから馬飼ひになる、そこで主人が小さな脇差の一本ぐらゐは呉れる。若し呉れなければ仕方が無いから、士に附いて戰場へ出掛け、そこで死骸の佩いて居る刀を自分が分捕つてそれで敵の生首を落とす、そしてその手柄に依つて武士に取立つて貰ふ、それから此方の腕次第である、勤めて手柄をするやうにすれば宜しい、何によらず人並み以上の働きをせねば出世をすることは出来ぬ——といふのであつた。

吾々は裸かにされた場合に果してこの加藤清正の

言ふやうな努力をする覺悟を有するであらうか。加藤清正はかういふ人間であつたればこそ、あゝいふ偉い人になつたのである。人並み以上の働きをすれば段々取立てられるといふことは實に尤もな話で、この加藤清正の言葉には私は常に感服してをるのである。吾々も加藤清正のやうな覺悟を有つて、常に勤勉努力、人並み以上の働きをするやうでなければならぬのである。

今日社會の成功者と稱せらるゝ人々は、皆な勤勉努力の結果、その地位を得た人達である。雑誌などを見るとき、随分盛んに成功者の話が説かれてあるが、

なか／＼一足飛びに成功するといふことは出來得べきことでない。私は、今日の雑誌の書き方にして、餘程注意して貫はぬと非常な悪影響を來たす虞れがありはせぬかとおもふ。例へば成功談にせよ、その成功者の苦心の最初からを順を追うて讀んでゐる人はさうでもないか知れぬが、田舎の人などが最後の處ばかりを讀んでから一足飛びに成功し得られるものだらゝに思つてしまふと、とんだ間違ひを來たすことになる。まことに「羅馬は一朝にしてならず」である。成功は決して一朝一夕の事ではなく、一に勤勉力行、努力奮闘の結果であるのである。

勤 勉

然しながら、この勤勉努力がまたなか／＼六ヶ敷
い。吾々の身邊は、常に情慾や金錢やその他様々の
外部の壓迫や教唆やを受けて、動もすれば自分の正
しい判断を誤り、誘惑に對する抵抗力が鈍つて、遂
には墮落の淵に陥ち込んでしまふやうなことになる。
従つてこれに抵抗して行くだけの強い意思がなくて
は成功は六ヶ敷いのである。何處でも良心の示すと
ころに従ひ、忠實にその本分を盡し、職業に興味を
持ち、誘惑を退け、精力の浪費を避け、また金錢を
も適當に貯蓄して、決して放縱無頼な生涯を送つて
はならない。而してそれが爲めには、凍るやうな互

寒の風に吹かれることもあらうし、燬くが如き炎天
に晒されることもあらう、或はまた眠くとも寝るこ
と叶はず、思ふことも自分のまゝにはならず、時に
は主人に打たれ撲られるやうな場合が無いとも限ら
ず、随分辛い悲しいことがあるであらう。けれど
もこれを忍んで、踏みこたへて行くのがすなはち意
思の鍛錬である。將來一流の實務家或は一流の人物
となるには、その徒弟時代少年時代或は青年時代に
於て是非ともこの辛抱をしなければならぬ。そし
て自己の本分とする職業に全身全力を打ちこんで勤
勉努力して行くことが肝要である。

勤 勉

紀律

紀律といふことがまた職業に従事するものにとつて非常に必要である。萬事に紀律を缺いて服従の精神の乏しい人間は、職業の成績が擧がらぬのは勿論、人間として實に困るのである。誰も知るとほり軍隊はあのやうに紀律服従の關係がやかましいのである。あのやうにやかましい紀律に依つて秩序が保たれてあればこそ、軍隊には勢があるのである。普佛戰爭の前、普魯西の國へ佛蘭西のストツフェル將軍が視察に行つたことがあつたが、その時の將

軍の復命書の中に「獨逸の軍隊の規律は實に能く整うてゐる、萬事に服従を守る習慣が養成されてゐる。處が我が佛蘭西の傾向は殘念ながらさういふ點に缺けて居つて少しも堅實な道念がない、斯くの如き兵隊は實に所謂無精神無紀律の兵隊である、これではとても戰爭には勝てない」といふことがある。兵隊もその通りであるが、吾々職業に従事してゐるところのものに就いてもすべて同じことである。矢張り、上下の間が一致してゐて上の命令が能く下に行はれる、すなはち下は上に服従するといふことがうまく行つてゐない處には、職業の繁昌は見られない。皆

紀律

六四
なが己れ勝手の主張をするやうな處は繁昌しない。
一體下役の者は上役の命令に服従しなければならぬ。
上役の者は上へ行く程段々に長年の或は深く廣い經
験のある人である。従つて命令を下すに就いては相
當の自分の考があつて、その計畫に依つて命令を下
すのであるから、その命令に服従しないと云ふこと
になる、決して良い結果を得られる道理が無い。
兎角我が國の人は紀律に服従するの觀念に乏しい。
例へば、公園などで、花を折つてはならぬと禁札が
あるのに、花を折つて見せびらかしてゐる人間があ
る。紀律を尊ぶ習慣が全く缺けてゐるのである。西

洋あたりでは徒歩競争その他競技の場合に於ける審
判官の審判は非常に尊いものとされてゐて、如何な
る場合にも必ずこれに服従するの習慣がある。然る
に我が國に於てはかういふ場合の審判に對して動も
すれば不平を並べて、すなほに服従することをしな
い。これは實に能く考へなくてはならぬことである。
すなはち速かにこれを改めて、事大小に拘らず紀律
には確實に服従するやうな習慣を養成せねばならぬ
のである。
處がこの紀律に服従するといふことはなかく六
ヶ敷いことである。殊に自由の利く學校生活から離

六六
れて實務界に入つた青年達にとつては、容易ならぬ苦しみである。早出晩退少しの休みも無く働き詰め
に働かねばならぬといふことはまことに困難である。
今までの學校生活に比較すると、何事も紀律的にな
つて我儘や自由が利かなくなる。それでそろ／＼不
平が起る、仕事に興味が無くなる、飽きが來るとい
ふことになるのである。學校を卒業して直ぐに會社
なり銀行なりへ奉職したものが、暫くして仕事に詰
まらないといふ不平を訴へて來るといふことは能くあ
ることであるが、これは皆な紀律的生活に慣れぬ結
果である。今まで自由に吞氣であつた學校生活から、

急にその境遇が一變する結果、備主や上役の人の命
令なり言ひ附けなりが、馬鹿に自分をいぢめるやう
に聞える。そこでつい不平を起すといふことになり、
従つて仕事に面白くなくなつて、爲なければならぬ
仕事も投遣りにするといふことになる。かういふ缺
點は勿論外國人にも無いわけではないが、我が國人
には特に餘計にあることのやうに思はれる。
一體物事の整理といふものは、利息の複利法と同
じやうなもので、紀律正しく一々整理してさへ行け
ば、別にたいした手数もかゝらず、キッチンと片附い
て行くものであるが、投遣りにして置くと、その手

紀
律

六八
数が二倍にも三倍にもなつて来て、その整理がなかなか困難になるのである。スコットの言葉に「何事にも爲すべきことは即時にこれを爲せ、業務の後には休息を取れ、用件の手に入るに従がつて敏速に、確實に順次に處理し置かざる時は、漸次他事堆積して一時に圍繞逼迫し來たり、如何なる人の頭腦もその混亂に堪ふることあたはず」といふのがあるが、これは如何にも眞理である。仕事を投遣りにして置いては、どんな偉い人でも一度に遣れるものではない。

そこで仕事は必ず几帳面にやることに爲なければ

ならぬ。すなはち紀律を重んじ、服従の精神を涵養して、はきくと物事を處理して行くの習慣を造ることが肝要である。

忍耐

忍耐とは、心の粘りである、粘着力である。何んでも粘りが強く執念深くどうでも斯うでもやつつけて行かうといふ心である。どんな酷いことでもどんな苦しいことでも我慢をする、力強く踏み耐へる——といふ精神、根氣がすなはち忍耐である。どうも近頃の人は仕事を樂にのみしたがる風がある。

忍耐

少しばかり小言でも言ふと直ぐ膨れ面をする。どうもこれが今日の一般の風のやうである。昔の人は全くさうではなかつた。昔の人が一つの職業に就いて一人前にならうといふには、容易なことでは出来なかつた。寒天にさらされ、炎天に燬かれても事とせず、また棒先で突かれたり、撲られたりしてもそれを耐へて、努めて行かねばならなかつた。殊に劍術の修業の如きは、生まやさしいことでは出来なかつた。嘗て或る講談で柳生飛彈守が劍術の秘傳を受け、たことを聞いたが、それは、容易なことではないのであつた。これに比べると、どうも近來の人は仕

事が樂である。

『米は杵に打たれて白くなる』といふ諺があるが、まことにその通りで、人間とても種々様々の艱難辛苦を耐へ忍び、これを切り抜けてこそ大事業を成就すべき偉人となり得るのである。それを少しばかりの事が氣に入らぬからと言つて、直ぐに腹を立つて飛び出したりするやうなことでは、到底立派な人間にはなれない。

氣に入らぬ風もあらうに柳かな

といふ俳句があるが、世の中には氣に入らぬこともあり、またいやなこともあるけれども、それを逆ら

はずに堪へ忍ぶことが大切である。で無ければ、柳にも劣るわけである。『大器晩成』『急がば廻はれ』である。自分がどこまでも將來大いにやらうと思へば僅かなことに腹を立つたり、愚痴をこぼしたりしてはならぬ。殊に己れに克つて自分の卑しい慾を制して、理想の爲めには好きなものや好きなことも止める決心がなければならぬ。克己力が無ければならぬ。忍耐とはすなはちこの謂ひである。酒が飲みたい、煙草が欲しくて仕方がないといふのであつても、一度その酒が悪い、煙草が悪いといふことを知つて、それを止めようと思つたら、その

位のこととは出来るやうでなくてはならぬ。すなはち、精神を立て、己れの慾を抑へる力を養はなくてはならぬ。そして衣食住すべてに就いて簡易生活に耐へるやうになり、自分の収入の一部は必ず貯蓄して、將來の活動の爲めに計るところがなくてはならぬ。つまり、徒らに虚榮虚飾を追うて無暗矢鱈に良い著物を著たりすることなどに眼を附けないで、簡単な生活に耐へる様な習慣を養ふ必要があるのである。

情操の修養

情操の修養とは言ひ換れば誠の人情の修養である。

而して吾々が職業をやつて行く上に於て就中大切なもの、謙遜、親切、報恩の情義である。以下是等の一つづつに就いて順次に説いて行かう。

謙遜

一體人はどんな人を好くかといふと、誰れでも謙遜な人を好くのである。腰の低い愛嬌のいゝ人を、吾々は好くのである。これが自然の人情である。自分が好きば人も好く。そこで謙遜の必要なことが分つて来る。殊に商店に従事して居るものにとつてはこの謙遜が一層必要である。應接にも談話するにも

謙遜で無くてはならぬ。どうもあそこの店に行くと店のものがツンとしてゐるのでいやな心持になるなどといふことは、よくあることで、さうなるとどうしてもその店は繁昌することは出来ぬ。店の不利益になる。店の不利益といふことは主人の損ばかりかといふと、決してさうでない。さういふ店員は決して出世が出来るものでない。否、單に主人や自分の不利益になるばかりでなく、他人を不快にし迷惑を及ぼすことになるのである。他人に迷惑を及ぼすといふことは容易なことではない。これは世の中の誰れでも慎まなければならぬことであるが、殊に人相

手の職業に従事するものにとつては、大切な、氣を

附けなければならぬことである。そしてこの謙遜は、身分や地位が高くなれば爲なくともいゝかといふに、決してさうでない。寧ろ高くなればなる程、上になればなる程、謙遜しなければならぬ。丁度稻が實るに従つて段々頭を屈めるやうにありたいものである。而してそれには、温雅にして禮儀正しく、儀容言語等すなほに而かも高尚なることが必要である。英語の所謂ジェントルマンシップ (gentlemanship) が必要である。心さへしつかりして居れば外は如何に汚れてゐてもいゝと唱へるやうな

人も稀れにはあるが、今日はそのやうなことは通用しない。身體はきたなくても宜しい、衣服は亂れてゐても構はぬといふやうなことは、心ある人の探らざる所である。吾々は身分相當の禮式を守らねばならぬのである。身分相當の禮儀を重んずるといふことは、人に接する當然の道である。

親切

仕事をするに當つては親切を旨としなくてはならない。何事もたゞお役目によつたわけでは成績が擧がるものでない。自分の職業に就きては、お役目以

親切

七八
上に常に工夫を凝らし。發明を圖つて、自分の力の
出来るだけ仕事を打ち込むだけの親切が無くては
ならぬ。人に見えぬから宜しい。人に分らぬから構
はぬといふので、仕事の手を抜いたりするやうなも
のが往々にしてあるものだが、そんなことではなら
ぬ。斯くの如きは立派な罪惡である。例へば親切心
の無い女中が座敷を掃除すると、たゞお役目にバタ
バタと無暗に拂塵具の音を立てるだけで、障子の棧
にたまつた塵埃の残つてゐるなどにはお構ひなしで
ある。このやうな女中は必ず主人に信用されなくな
る。そして何時になつても出世の出来ないのは勿論、

何時かは解雇されるやうな憂目を見るのである。故
に吾々は如何なる場合にも親切といふことを忘れて
はならない。

また親切の心はやがて同情の心である。同情とい
ふこともまた大切なことである。何事に依らず同情
の力ほど偉大なるものはない。どんな偉人でも周囲
の同情無くしては名を成すことは出来ない。商店の
繁昌するのにも同情の結果である。使用人が主人の爲
めに盡すのも、主人が使用人を取立てるのも均しく
同情である。冷やかな間柄で銘々勝手なことばかり
言つたり爲たりして居ては、決してその間が圓滿に

親切

七九

行くものでない。従つてまたその店は繁昌しないのである。

『己れの欲せざる所を人に施す勿れ』といふこと
の半面は、『己れの欲する所を人に施せ』といふこと
である。我が身を拈つて人の痛さを知れといふことは
他人の災厄に同情せよといふことである。そこで吾
吾は、自分達の同僚の不幸に對しては、互に助け
はり、その人の爲めに圖り、以て常に親切に富んだ
暖かい同情の心で交はるやうにしなければならぬ。
一體この親切心、同情心なるものは、人類にのみ
特有の性質であつて、鳥や獸にはこれがない。すな

はち、親切心や同情心の修養は、道家ばかりの專
門に屬するものでなく、一般の人類否一個の紳士た
るもの、是非共具へなければならぬ資格といふべき
ものである。

報恩

近來の道徳を言ふものは、兎角やかまし、理屈ほ
いことばかり唱へてゐて、報恩といふことを閑却し
てゐるやうな傾きがある。そこで此處に私が報恩な
どと言ふと、古い道徳を言ふ人かなぞのやうにおも
ふ人があるかも知れぬが、決してさうでない。恩を

知る人で無ければ本當の人物で無いのである。今日道徳が甚だしく腐敗して居るのは、色々の原因からではあるが、一般に世の中の人々が恩を知ることが少なくなつたといふ事實が、主なる原因の一つである。維新前の人を見ると、この報恩といふ點に關してはなかく近代の人の及ばぬところがある。近代の人は、動もすれば、恩などは何處を風が吹くかといふ顔をして、君國の恩も忘れ勝ちであれば、ことに依ると親の恩までも忘れてゐるものが少くないのである。況んや師匠や主人の恩に於いてをやで、實以て主人の恩などは更に知らぬものが多いのである。

この傾向は近來殊に甚だしく、従つて兎もすれば、主人と使用人、資本家と労働者との間に社會問題が起つてゐる。労働賃銀増すべし、否増すべからずといつたやうな喧嘩が絶えぬのである。これは獨立自尊といふことを穿き違へて、權利といふことのみを主張して義務の觀念に乏しくなるからである。幸に我が國の或る部分に於ては未だそれ程のことはない處がある。主人と使用人との間には未だ餘程情味の暖かいところがある。どうかこの特色は益々伸ばして行きたいものである。

る、そこでそれに相當するだけの報効を爲してこれに酬ゆるのは當然である。伊藤仁齋は『立身を望まんによりは御恩を忘れるな』と言つてをるが、實に至言である。吾々は、如何なる處にあつても、如何なる時に於ても、神の恩、君の恩、師の恩、主人の恩、親の恩を忘れてはならない。この恩を了解しないものは、道徳の微妙な異彩を發揮することは六ヶ敷い。殊に人に雇はれて居るものは、たい給料を貰つて居るといふ考だけで無く、給料の關係以上に主人の恩といふことを考へて、その恩義に酬いる覺悟が無ければならぬ。恩義を知るといふことは、兩者の間の

關係を餘程圓滿にし、潤澤ならしめる効果を持つて居るものである。

身體の修養

是からの社會、すなはち競争の烈しい今後の社會に於ては、身體が弱くては決して終局の勝利は得られない。優勝劣敗の理法に依つて自然に倒れるよりほかはないのである。善い事を爲ようとしても身體が弱くてはどうすることも出来ぬ。そこで今後の社會に雄飛しやうとするものは、健康といふことに十分の注意を拂はなくてはならぬ。

健康

身體を鍛へて健康の増進をはからなくてはならぬ。而してそれには、消極的方法としては暴飲暴食を避け、積極的には適度の運動を爲して身體を鍛へて行かねばならぬ。朝起きたら冷水浴をするとか、深呼吸をするとか、心懸け次第でこれは決して面倒なことではない。

身體が弱くては仕事に堪へられぬばかりでなく、今後の社會に立つて職業を盛んにやつて行く上には多くの頭の力、すなはち智恵や記憶力を非常に要す

るのであるが、身體の弱い人にはどうしても健全な腦力が得られない。健全な身體に始めて健全な腦力が宿るのである。身體が疲れて來ると頭が疲れて來る。これは誰れでも経験のあることで、吾々は大きい腦力を働かせる爲めには大いに健康に注意せなければならぬのである。

古來から大仕事を爲して偉人と言はれてをる程の人は、殆ど皆な人並み以上の健康者であつた。身體の力の絶倫なものであつた。かの英吉利の大政治家グラッドストーンの如きは、他の人が十六時間でする仕事を四時間でやり、而かも毎日人の働く二倍即ち

十六時間づゝも働いたといふことである。すなはち
グラッドストーンの十年の仕事は、普通の人が八十年
もかゝらねば出来ぬ勘定である。而もグラッドストー
ンは九十歳までも長命してゐる。これは偏へに健康
の賜であつた。

吾々も人一倍活動する爲めには、是非とも身體の
健康を計らねばならぬのである。そして身體が健康
であれば、自然日常生活が愉快に出来、仕事も敏
活に進んで行くのである。健康は如何なる人にも必
要なものであるが、職業に従事して立派に成功しや
うといふものには特に必要であることを銘記しなけ

ればならぬ。

『日々の心得』

以上で大體「職業道德」といふものがどういふも
のであるかといふことの説明を済ませたつもりであ
るが、さて然らば、是等の道德を實行し能くその修
養の實を擧げるにはどうしたらよいか。これに就て
は色々の方法があり、わけてもその根本から言へば、
どうしても宗教に依らねばならぬといふのが自分の
平素の持論であるが、それは兎に角、先づ直接の方
法としては日常の生活に於て能く我が行ひを反省し

て實地上から鍛錬して行くといふことが大切である。九〇
精神の修養をしても、説教を聴いても、また善き
書物を読んでも、たいそれを棚の上へ上げて置いた
のでは何んにもならぬ。能く日常の生活に於てこれ
を實地に當て嵌め、小さなことからだん／＼に鍛錬
して行くのが肝要である。
而してそれには、我が身に引き較べて見るものが
あつて欲しい。我が行ひに引き較べて反省して見る
ところの一目瞭然とした尺度が欲しいのである。こ
こに至つて、所謂『座右銘』の如きものが必要にな
つて來るのである。座右銘は實に我が心を映すべき

鏡である。これに依つて我が行爲の是非か善か悪
かを映して見、これと首つ引きをして何事に拘らず
自分を刺戟し、自ら警め自ら反省するのが、何より
有効な方法である。そこで自分は、今より數年前か
ら、左に掲げるところの『日々の心得』なるものを
作り、自ら反省するの資料、すなはち反省の鏡とし
てをるのである。

- 日々の心得
- 一、(勤勉) 熱心に精出して眞面目に仕事を爲すこ
と。
 - 二、(忠實) 何事を爲すにも明日を頼むべからず、

三、(誠意)

今日爲すべき事は必ず今日之を爲すこと。日々につきあひは真心を表すを第一とし、義理を缺かず禮儀を失はず、又人の迷惑にならぬ様氣を付けること。

四、(信用)

能く規則に従ひ、時間と約束とは堅く之を守り、金銭物品の支拂返却等は期限を違へぬこと。

五、(報恩)

常に報恩の念を忘れず、恩ある人には訪問、文通、墓參等を怠らぬこと。

六、(同情)

人には親切を盡し、人の不幸を思ひやり、病人其他難儀の人などを憐むこと。

七、(節儉)

不如意不自由を常と思ひ、質素儉約を主とし、己に克ち慾を制し、貯蓄に心懸くること。

八、(衛生)

命あつての物種子なれば常に衛生に注意し、身體の強健を圖ること。

九、(反省)

獨りを慎み、朝晩我が身を省みること。時々無邪氣なる樂を爲し、常に氣持よく暮すこと。

十、(快活)

そしてこれを自分の居室に掲げて居るは勿論、自分ばかりでなく、自分の知合ひの人々その他にも廣く配附して、これが實行を勧めお互の修養に資せん

ことを希うてゐるのである。

この『日々の心得』のうちには今まで述べた修養の盡くを包含してある。毎日自分の行ひをこれに照らし合はせて、悪しきを改め善きを勧めて一意向上に勤めて行くならば、必ず立派な人間となり、偉い實務家となることは、私の信じて疑はぬところである。すなはち、餘り偉いことを考へないで、かういふ卑近なところから、我が行を改めて行く、例へば斯ういふことをしたがこれは道に協つて居るだらうかとこの『日々の心得』に照らし合せて見る、そしてそれに背いてゐたならば、早速これを改める、若

し協つてゐたならば益々それを進めて行くといふ風にして行くのである。つまり、

折りかけて月に愧かし野邊の梅

といふ句があるが、梅の枝を折らうとしたがお月様が天から見ているのでこれに愧ぢて折ることを止めると云ふところの心である、この心を持つて進んで行くならば、不敏と雖も必ず吾々はその理想の人格にまで到達し得るといふことを私は信じて疑はぬのである。

私は讀者諸君が能くこの『日々の心得』を利用して下されんことを祈りて止まないものである。

職業と幸福

斯くの如くして段々道德の力を養ひ、以て所謂天職を果たし、人生を最も意義あるものたらしめ、楽しんでこの世の中に處するといふやうな程度まで達しなければならぬ。徒らに地位や金銭を得たいけで、それで人生の目的が達し得られたといふものではない。眞の人生の目的はほかにある。金銭や地位にのみ戀々たるは、決して本當の人間らしい行爲とは言へないのである。然し人物が立派になり事業の成績が擧がれば、地位も金銭も自から附隨して來る

のである。だから決して地位や金銭のみを直接の目的としてはならない。地位以上、金銭以上のところに眞の目的の存することを決して忘れてはならぬのである。

世の中は何時も月夜に米の飯といふやうな甘いわけには行かない。吾々が世の中に立つて職業に従事して行くには、随分苦勞もあり困難もある。晴天もあれば曇天もあり、風も吹けば花も散る。決して面白くないことばかりは無いのである。維新前の志士高杉晋作と野村望東尼との合作の歌に、
おもしろき事もなき世を面白く

住みなすものは心なりけり
 といふのがある。上の句が高杉晋作、下の句が野村
 望東尼のである。私は常々これは非常な名吟である
 と感服してをる。すなはちこの面白くない世の中も
 心一つの持ちやうで面白くも可笑くも暮らせるので
 ある。殊に自分の爲すべき仕事を悉く成し遂げた時
 の心持ほど愉快なことはないのである。そこに計り
 知られない満足があり、幸福があるのである。
 私は職業に従事せるすべての人々が、能く上に述
 べた職業道德の實踐に努め、そしてこの計り知られ
 ない満足幸福の境地に到達されんことを心から祈る

次第なのである。

すなはち、何處までも職業第一の心掛けがありた
 と思ふ。

後篇

事務整理と根本的の二要件

職業を執る上に就きて事務的の方面より考へて頗る大切なことは所謂少き力を以て多くの事務を處理することである。すなはち事務整理を完全に成し遂げることに何よりも必要である。

この事務整理を圖り内容の充實に努めるに就ては二つの根本的の要件を實行するにありと信ずる。これは役所は勿論のこと、民間の會社銀行等すべての執

務に關して適用さるべきものである。

二つの根本要件

二つの根本要件とは

第一、執務の能率を向上すること。

第二、執務の精神を改善すること。

れである。

この第一に就ては、一般にその職に當る者がその作業能率（エフキション）を増加向上して、今迄迄一人分働いて居つたものが、一人三步となり一人半分働くといふやうに、今までよりも多く働く覺悟

二つの根本要件

がなければならぬ。
 (1) 而してこの能率を向上せしむるには、各員が各自に訓練發達を怠らずその力量と精神とに於て最善を盡すこと、すなはち天職の力量の許す範圍内に於て最高の作業を爲すこと。
 (2) 如き不注意、怠慢、過誤等を少なからしめ、各種の損害を防止して執務上圓滿ならしむること。
 (3) 各員が己れの「イニシアチブ」即ち「發意」を以て發見工夫を爲し、能く事務の眼目を捉へて出來る丈各種の經濟的手段を發見し、利用し得べ

き一切の力を最も巧に應用すること、すなはち同じ力を用ゐてもそれ程效果少なきことあり、また力を入れないで宜い處へ無暗に力瘤を入れるのもつまらぬ。要するに常に出來る丈け經濟的手段を發見することが必要である。
 (4) 各執務員として永く同一地位に止まることを名譽とする習慣を養成すること。我が國では餘り永く同一地位にあるは氣の利かぬものとして居るがそれが爲めに眞面目に事業の事を研究もせず、趣味も快樂をも感じない。そのやうなことでは事務が擧がるものでない。

(5) 管理者は何處までも部下の選叙を慎み、賞罰を明かにし、公平を旨とし情實に拘泥せず、適材を適所に配置し、そして従來の經驗、因果の理法に照し、その局に當る人々の力と知識とを綜合蒐集して、その間に一つの科學的方法を發見してビジネスライクに仕事をすることを考へ、部下に對し精神上、事務上、誘掖獎勵を與ふること。右の如くして始めて事務の能率は向上し得るものと思ふ。従來事務が膨脹すれば直ぐに定員増加の要求に逢ふは官民を問はず一大通弊である。人を増加するよりも各人の能率を殖やすことが大切の問題である。

る。事業の膨脹と各自の能率とを常に一致せしめるのが今日の問題である。

縦の道德と横の道德

第二には執務の精神を改善することである。我が國には一般を通じて一つの弊風がある。それは大體物を縦に見る偏寄つた習慣のあることこれである。君臣、父子、主従、上官と下僚、役人と人民といふやうに、目上の言ふことは何でも真理で、これを奉ずることが最上の道德と心得、これを重んずる風がある爲めに、何でもその仕事に忠不忠は別として、

たい叱られさへしなければよいといふので、上役の手前を甘くやつて置くといふ氣風がある。早い話が公園の水を呑む茶碗でも、鎖を附けて置かぬと持つて行つてしまふ。斯ういふ風なことは縦の道德の餘弊であるが、今後の道德は斯く縦ばかりでなく、横にも行はれなくてはならぬ。横の道德とは、お互に尊敬し合ひ、お互に相談し合ひ、共同して何事も善くして行かうといふ思想で、ビジネスには非常に密接の關係があると思ふ。

例へば役所では紙や炭、油などを不經濟に使ふ濫費の習慣がある。これは縦の道德から來た弊害である。

る。然るに一旦これを「渡し切り經費」の制度にする。と經費が大變に經濟になつて來る。故にお互に利害といふ共同觀念則ち横の道德が發達すれば、官物濫費といふやうの弊は矯正せられるであらう。

監督主義と信任主義

また從來の執務法は餘りに多忙に失する傾きがある。これは時間の利用に等閑なる爲めで、若し時間を經濟的に使へば多忙に失するやうのことはない。長上の見ぬ時は新聞を読み煙草を吹かし無駄話をするとといふ傾きがある、これまた縦の道德の然らしむ

るところではないか。
 私は時間利用の法として自分の會て居た役所に於ては、家族の病氣その他緊急用の外一切私用の面會を斷り、面會者は外套手袋著用のまゝとし、應接室では立談とし喫煙などせざることにした。
 また臆劫がり面倒がるを省く爲め文書の往復も先方の照會書の裏に回答を書いて出すことにした。また勞力の融通として甲の局の繁忙の時に閑散な乙の局より援助するといふ相互共助の制を開くことにした。

また我が國では上に立つ人が神經質で下の人に物

事を委さぬ習慣があるが、それでは下の人は十分に力働を發揮することが出来ぬ。信任主義を以てその權限を擴張し、多少の過失が出来ても思ひ切つて委す方が大局に於て利益である。
 また我が國の役所等は兎角窮屈然として四圍の空氣が不透明で、皆いや／＼ながら仕事をしてをる風がある。私は何處までも元氣よく心持ちよく仕事をすることをやうにしたいと考へる。
 これを要するに、事務員をば一個の人として取扱ふことが執務改善の根本原則と思ふ。監督主義に依つて彼等を縦の道德を以て縛り、子供扱ひにする時

は、各自長官または主人番頭の目の前を繕ふことになつて無責任に仕事をするに至るは争ふべからざる成り行きであると思ふ。

金銭貯蓄の必要

執務者にとつて又大切な事は金銭貯蓄の必要の事である、凡そ人天下に立つて堂々と自己の所信を主張し實行するには、どうしても實力のほかに金銭といふものが伴はなければならぬ。常に相當の人格を保ち義務を盡し道徳を行はうとするには、一方に於てどうしても金銭といふものが無くてはならぬ

のである。世の中は理屈ばかりではいかぬ。道徳は固より必要であるが、然し力の抜けた道徳は何にもならぬ。三才一才といふやうな具合で、斯くの如き人は誠に役に立たぬ。如何に力瘤を入れて藻掻いても力の抜けた道徳では所詮正義を行ふことは出来ぬのである。

かるが故に一方に於ては自重自尊の念を盛んならしめ、國民競争に於ても個人競争に於ても、絶對に勝を制する覺悟が無ければならぬが、それには知識があり、思想に富み、體力が強壯である上に、なほ金銭の力を要するのである。一個人として如何に人

格に於て優り、義務觀念に於て優つて居ても、その人が貧乏であるならば、事を爲すに當つても他人の力を借らねばならぬやうになる。すなはち金が無いとどうしても卑屈になるのである。

世の中を四尺五寸に暮しけり

五尺のからだ置き所なし

といふ歌があるが、貧乏で負債などをなし、不義理をして居つては、この廣漠たる天地も狭く、五尺の身體の置き所なしといふまでに至るものである。これに反し實際に慈善事業等の如き善事を爲し、その他社會公共の事を實行せんとするには必ず金錢が無

くてはならぬ。茲に至り執務者に取り金錢も亦實に大いなるものであるといふことが了解出来ると思ふ。

貯蓄の必要及びこれが活用は實に上述の如きものであるが、すなはち立派な事業を爲し遂げようとするには是非とも金錢が必要なのであるが、たゞ然しこの金錢を貯蓄するに當つては、金錢の奴隸とならぬやう注意することが肝要である。

とはいふものゝ、學校などに於ては、學童に貯蓄の必要を鼓吹することをば、あるひは小兒の性質を鄙吝ならしむる虞れがあるとか、あるひは金錢の問題は兎角穢はしい問題であるとか言つて、餘り歓迎

しない向きもあるが、それは抑も誤りである。元來自己の神聖なる勞働に依つて護得せるところの金錢を適當に貯蓄しこれを利用してまた適當にこれを消費するといふ思想は、決して賤しむべきものではないのである。

眞個の日本人たれ

明治の時代は先帝陛下の聖旨に基き、國是を開國進取に定め、著々として國運の發展を來たし、眇として聞えざりし我が蜻蛉洲を世界に紹介して宛然大國の觀あらしめ、正さに「日本國」を「日本國」と

して進歩せしむるに至つた。

然しながら忌憚なく評すると、明治年間に於ける進歩は多く泰西文明の摸倣たるに過ぎなかつたので、未だ獨立して我が國の文明を世界に紹介するに至らなかつた。而已ならず個人として「日本人」はその人格思想に於て未だ世界的たることが出來なかつたのである。

大正の時代に於ける日本人は深くこれ等の點に鑑み努力奮勵大にその人格思想を高めて眞個の「日本人」を造り、而して益々我が國の眞面目を列強の間に宣揚せしむる重大なる責任を有することを自覺し

なければならぬ。自分は今、特にこの感の深きを覺え、今後の新日本を經營すべき若き働き盛りの職業に従事者の前途に向つて希望するところが尠くないのである。

眞の忠君愛國

忠君愛國は「日本人」の骨髓である。この精神は祖宗三千年來養はれたる國民性であつて、日本人の頭腦に深く刻まれ國內に磅礴して未來永劫變るべきものでない。實にこの點は、「日本人」の有する最大の誇であり又絶高の美德である。然し唯注意すべき

は餘りに形式に流れないことである。徒らに忠君を説き愛國を唱ふるも、いざといふ場合に斷乎たる處理が取れぬやうでは、忠君愛國の化石であつて物の役に立つべくもない。今後日本を背負うて立ち働く人は何處までもその精神を行爲の上に顯はすやうに力めなければならぬ。

犠牲的精神

人類が萬物の靈長たる所以は、實に身を獻じて他人の爲めに盡すといふ犠牲的精神が有るからであつて、若しこの精神が缺けてゐたならば、禽獸と何等

擇ぶ所はないのである。忠君愛國の極度は自己を犠牲として君國の爲めに盡すにあるが、犠牲の精神は決して君國の危急といふやうな場合にのみ發露せらるゝものでなく、日々の行爲の上に於てこれを表はさねばならぬ。

すなはち骨肉に對する慈愛、朋友に對する信義、他人に對する同情等、形こそ變れ、ひとしく皆これ美はしき犠牲の精神の流露したものにほかならぬ。

吾人がこの世に處するには、須らく自己の勞力と利害を犠牲として顧みぬといふ心懸けを必要とするので、すべての善事には其根柢に於て初めより必ず何

等かの獻身的の事がある者である。「身を捨て、こそ浮む瀬もあれ」で、自ら善事なりと思惟することは身を挺して難に當り、眞實に斷行するといふ意氣こそは、日本の今日の大を爲した所以であつて。所謂武士道の眞髓もこの精神の發現にほかならぬ。

今後の中心國民はこの點に就いてもなほ一層眞面目に思を潜める必要があると思ふ。

人格權威及び名譽

今日までの「日本人」の多くは、一朝事あると直ぐに國家々々と叫ぶが、而かもそれが餘りに外形的

に流れて自己の人格、權威及び名譽を偏輕するの傾
きがある。國家よりしての「日本人」も必要である
が、なほ一步進んで世界に於ける「日本人」否人類
としての「日本人」といふ見地から、今少しく個人
の價値を尊重するやうにせなければならぬ。現時の
社會のやうにその人の人格よりも地位や肩書や財産
を重んずるといふやうな弊風に囚はれてゐては、到
底眞摯なる社會の發達は望み得られないのである。
今後の「日本人」は何處までも人格の修養を第一
とし、その一言一行は直ちに社會に重きをなすとい
ふやうに權威あらしむると共に、自己の良心に訴へ

て可と信ずる所は、飽くまでも貫徹するといふ意氣
——而かも徒らに名を成す爲めの努力でなくして、
自己の經綸を天下に行ふ爲めの名譽心を養成したい
ものである。青年のすべてが斯かる考を以て個性を
尊重するやうになると、世の中は自然に廓清せらる
るに至ると信ずるのである。

相手は天

今日の人間は徒らに眼を地平線上にのみ馳するが
故に、その規模、計畫、度量又は抱負が餘りに狭小
に失し、随つて他人の成功のみを羨望して自らの運

相手は天

命を開拓することを忘れてをる。偶々成すあるの人があつても、望む所は地位、財産の範囲を脱せぬといふ有様である。

然しながら人間最後の目的は決して地位や金銭にあるのでなく、もつと大なるものがある。すなはち生きた働きである。意義ある生活である。徒らに地上の富貴に齷齪するよりも、仰いで高尚遠大なる天を知ることを努めなければならぬ。西郷隆盛は「人を相手とせず天を相手とせよ」と言ひ、ルーズベルトは「天火に良心を焼かるゝにあらざれば、眞の政治家となること能はず」と言つた。老西郷にしても

ルーズベルトにしても、小事に踟躇せず胸中常に綽綽たる餘裕を存して鬱然大を爲すに至つたのは因より天性の然らしむるところでもあらうが、一つは思を高く天に注ぎたるに依つたのである。かの権謀譎詐一時を糊塗して功みに虚名を賣り、瞞著的に世渡りをなすが如きは決して大を爲す所以でなく、又永遠の大國民たる途でないのである。立國の根本と謂ひ日本人の立場と謂ひ、今後大いに世界的に雄飛せんとするには、陰險鄙吝の念を去り、天空海澗その心事を高潔にし、高所に著眼して天を知ると共に、天を怖るゝの國民とならなければ

相手は天

ならぬ。この一事は今日私の特に國民の中樞となる
若き働き盛りの職業従事者の頂門の一針として獻じ
たき苦言である。

道は邇きにあり

凡そ道徳なるものは、常に吾々の身邊に發生する
ものである。すなはち室を出づるに當つても、扉を
開け放しにしておくと、これを閉めて出るのでは
勞力の上にては何程の差があるものでない、また
事務室を去る時に机の上の書類をきちんと整理して
おくのとこれを投げ遣りにして置くのでは、注意

の點に於ては僅かばかりの相違があるばかりである。
而かもこの一舉手一投足の違ひが道を守ると守らざ
るとの岐るゝ所である。
吾々が道徳を行ふに當つては、須らくこれを邇きに
求めなければならぬ。上來本書に於て種々述べて
來たところも、必ずこれを實行しようといふ意志さ
へあれば、これを適用する場所や場合は、隨時隨所
にこれを發見することが出来るのである。而してこ
れを實行するに於て、始めて、吾々は職業を執る者
として人類たる本分を果たし得ると同時に、又國家
に益することが出来ると思ふのである。

24923
2

敢へて繰返して言ふ。道は通きにあり！
一二六

職業第一終

31
768

終

